る必要性である。

以上、本書の各章の議論を概観してきた。最後に、評者の所感を整理しておく。本書は、中東地域での存在感を高めているクルド民族主義組織のリーダーの行動、組織としての戦略や志向などを論じており、クルド人による政治運動の活動と思想についての基礎知識を得ることができる良書である。その特色は、中東地域の主権国家における非国家主体の影響力にあらためて光を当てるとともに、各国のクルド人居住地域で発生したクルド民族主義組織に関する事件の過程や発展と国際状況を組み合わせて詳しく分析したことにある。そのため、本書を読み通すことで、中東地域におけるクルド民族主義組織、広くはクルド問題の全体像が把握できるだけでなく、グローバルな視野のもとで、各クルド民族主義組織の起源と各組織間の関係について理解が深めることができる。本書が導入した3つのアプローチの中でも、特に「水平的空間次元」と「時間的次元」の視角を組み合わせた分析によって、クルド民族主義組織の発展と変遷についての地域横断的、さらには通時的な把握も可能となっている。

クルド民族主義組織について地域横断的かつ通時的に論じる研究書は決して多くはなく、管見の限りでは、日本語では唯一の書である。本書を読むことでクルド民族主義について理解を深めることができるだけでなく、中東地域における主権国家と非国家主体の全体像を見通すこともでき、その学術的な貢献は大いに評価されるべきであろう。さらには、「アラブの春」後に活発化した非国家主体の影響力を考えるうえで、クルド問題だけでなく、中東地域秩序の変化に関心のある読者にとって、本書は必読の好著である。

（奚　湘源　立命館大学大学院国際関係研究科）

Mustafa Menshawy. 2020. *Leaving the Muslim Brotherhood: Self, Society and the State*. (Middle East TodayBook Series). Cham: Palgrave Macmillan. xiii +203pp.

ムスリム同胞団（al-Ikhwān al-Muslimūn, Muslim Brotherhood, 以下同胞団と表記）は、1928年にエジプトでハサン・バンナー（Ḥasan al-Bannā, 1906–49）によって創設され、世界最大級のイスラーム主義組織へと発展した。今日のエジプト国内においては体制に弾圧され、一部のアラブ諸国の政府からは「テロ組織」に指定されながらも、中東地域のみならず世界各国に支部が存在し、イスラーム主義組織のいわば主流派としての影響力を保持している。同胞団にとって、中東の民衆による民主化要求運動として知られる2011年の「アラブの春」とそれに伴うエジプトの「1月25日革命」は大きな転機であった。革命後の人民議会選挙において、同胞団を母体とする自由公正党（Ḥizb al-Ḥurrīya wa al-‘Adāla, Freedom and Justice Party, 以下英語名の頭文字からFJPと表記）は第一党になり、その後の大統領選挙では当時のFJP党首ムハンマド・ムルスィー（Muḥammad Mursī, 1951–2019）が当選し、大統領に就任した。しかし、FJPによる政権運営は、軍部によるクーデターによって約1年で終わり、その後のエジプトでは、同胞団に対してかつては許可されていた社会活動までもが非合法化されるなど、厳しい制裁措置が取られ続けている。

本著『ムスリム同胞団を離脱する――自己・社会・国家』はこうした転機の年となった2011年から2017年までを研究対象とし、同胞団から離脱した元メンバーの語りを基に組織からの離脱のパターンを考察している。

従来の同胞団研究の多くは、社会運動としての同胞団に関心を寄せてきた。これらの研究は集団行動や政治化されたネットワークに対象を限定するものであり、同胞団を一体のものとして扱ってきたことが問題であると著者は指摘している。これに対して本著は、同胞団からの離脱という個人の行動に焦点を当てる。すなわち、同胞団元メンバーである「個人」に着目し、彼ら彼女らへのインタビューや文献調査を通して同胞団離脱の理由を調査し、そこに現れる言説のパターンを明らかにするものである。著者はこの離脱を「プロセス」と言説を組み合わせて理解することが必要であると主張する。本著における大きな問いは、「同胞団から離脱した人々は、どのように離脱を表現し、説明するのか」（4頁）である。

著者は、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院（SOAS）にて修士号を取得したのち、欧州委員会の報道機関やBBCプログラムコーディネーター、*al-Ahram Weekly*などでジャーナリスト兼レポーターとして勤務し

た経験を持つほか、欧州連合のジャーナリズム賞として勇敢なジャーナリズムを称えるロレンツォナタリ賞を受賞している。このような実務経験を経て、2016年にロンドンのウエストミンスター大学で政治学の博士号を取得し、現在はランカスター大学のポスドク研究員として、中東における宗派主義、代理紛争、脱宗派化に関連するプロジェクト（SEPAD, the Sectarianism, Proxies and De-Sectarianization Project）に取り組んでいる。主な研究対象は、中東研究、中東における言説と政治の相互作用に関するものであり、他に『国家、記憶、そして1973年におけるエジプトの勝利――言説による支配（*State, Memory, and Egypt's Victory in the 1973 War: Ruling by Discourse*）』［Menshawy 2017］などを刊行している。

本書は全6章で構成されており、全体の章立ては以下の通りである。

第1章　序論
第2章　感情的な離脱
第3章　イデオロギー的な離脱
第4章　政治的な離脱――2011年以降における同胞団からの離脱
第5章　2011年以前の離脱――断続性と連続性の比較分析
第6章　結論

第1章では、著者が同胞団からの離脱というテーマに惹かれ、この本を執筆する契機となった同胞団元メンバーの自殺事件を紹介した上で、本書における問いや研究手法を提示している。この元メンバーの友人は自殺の原因について、同胞団から離脱して以来抱えていた「精神的苦痛」と「心理的圧力」であると語ったという。この語りが、離脱がその個人に大きな困難を与えることを著者に気づかせる契機となった。同胞団が設立されて以来、著名なリーダーとの意見の相違を理由に、あらゆるメンバーが入退団を繰り返してきた。こうした一連の行動について、離脱にはパターンが存在しており、それを説明するべきであると著者は述べる。従来の同胞団研究の多くが社会運動としての同胞団に関心を寄せ、政治化された集団行動を対象に分析がなされてきたのに対し、本著は同胞団の内部に何が、誰がいるのか、という「個人」に焦点を当てること、そして個々人の離脱を分析するにあたっては批判的言説分析（critical discourse analysis）の手法をとることをまず提示している。

第2章では、同胞団元メンバーの語りをグループ化して比較し、離脱の傾向や段階をフレーミング化する作業を通して、同胞団からの離脱が「個人」のアイデンティティーを形成するプロセスであることを明らかにしている。本章では「感情」の存在を通じたフレーミングを行い、著者はこれをグループからの離脱を導く「感情的離脱のマクロフレーム」と名づける（27頁）。「感情」は気分を集約しグループ化する機能を備えていることを根拠に、同胞団からの離脱要因の焦点を具体的に分析するのに十分な機能を備える単位であると著者は主張している。同胞団を取り巻く出来事が「個人」にどのような影響を与え、離脱のプロセスにいかに作用したかに焦点を当てたインタビュー調査からは、同胞団とその社会サービスが、離脱を妨げる方向に機能していたことが明らかにされている。

第3章では、同胞団のイデオロギー、思想に対して、一部の同胞団元メンバーが離脱に至るプロセスの中でどのように行動したのかを明らかにしている。第2章は「個人」のみに焦点を当てたが、本章では「個人」に加え、個人の行動、個人間の相互作用、個人の解釈、個人を取り巻く状況及びその社会や国家をもイデオロギー構築の過程で役割を果たすものとして分析対象に入れている。これら「個人」を取り巻く環境が離脱に至るプロセスの再調整に影響を与え、「個人」のイデオロギー的「帰属関係」をシフトさせたのかを論じている。これを著者は「イデオロギー的離脱のマクロフレーム」と名づけている（22頁）。イデオロギー的離脱の事例の1つとして、同胞団以外の思想などに触れる読書を通して得た新しい知識が離脱の原因となるなど、社会生活と身近なものを挙げている。個人が読書を通じて、イスラームと現代性を調和させる方法についてのオープンな議論に参加することで、「再イデオロギー化のプロセス」（93頁）と著者が名づける現象が発生し、そこで個人のアイデンティティが変容し、離脱を選択するに至る事例である。つまり、社会生活の中のさまざまな契機を経て、同胞団員としてのアイデンティティよりも、「エジプト国民」としてのアイデンティティをより強く形成することが、同胞団からの離脱を促す1つの要素となるこ

とを、本章は明らかにしている。

第4章では、「政治的離脱」と名づけて時代を区切り、2011年以降に同胞団を離脱した元メンバーに焦点を当てている。この章では同胞団を去った、または去る最中にあった元メンバーが、「アラブの春」前後の時期の同胞団とどのように関わっていたのかを「個人」による語りから分析している。この分析によって、同時期に同胞団から離脱した人の多くにとって、2011年1月25日以降における同胞団の方針・行動が離脱の契機となっていることを明らかにされた。著者は当時の同胞団離脱の理由について、革命前、革命中、革命後の大きく3つの時代でフレーミングできると主張する。すなわち、第1に革命前の同胞団に対する幻滅を理由とする離脱、第2に革命の最中における同胞団のスローガンの1つとされる「エジプト国民との同一化問題」を理由とする離脱、第3に革命後の非革命的な同胞団に対する幻滅を理由とする離脱である。

第5章では、遡及的分析と前進的分析を組み合わせることで同胞団からの離脱の様相に現れた時間的変化を捉えようと試みている。第2、3、4章で展開した個人の感情とアイデンティティの形成過程の言説から離脱を辿る方法は、「段階的漸進義(stage-based gradualism)」であると名づけ(167頁)、言説の中で使用される言葉は個人の状況に応じて変化する傾向があるため、個人のミクロな感情についての言説分析からマクロな政治的展開の分析に移行するまでには大きなギャップがあると留保している。著者の前章までの論述に限界があることを指摘したうえで、本章では2011年以前と以降の同胞団離脱の理由には類似点が存在することに言及しつつ、2011年以降に離脱した者は2011年以前に離脱した者よりも、「離脱の言説」を語りの中で明確に言語化する傾向があることを明らかにしている。これは、同胞団が長い間紡いできた支配的な言説に対して、不満を抱いていた元メンバーが同胞団の言葉を組み替えて新たな言説を紡ぎ出し、言葉で対抗することを意味している。

最終章である第6章は、それまでの5つの章を総括した上で、本書の新しさを再度提示している。すなわち、離脱をプロセスとして理解するだけでなく、批判的言説分析の方法をもとに同胞団からの離脱をプロセスと「個人」の言説を組み合わせて理解することによって、パターン化し理解することが可能であることを提示し、本著を締めくくっている。

本著の最大の新規性は、同胞団から離脱した「個人」を研究対象としたことにある。著者は、同胞団を1つの集団として捉えてきた先行研究について、集団としての流れを理解するのに役立ち、集団のイデオロギーや内部構造を知る機会を与えたものとして高く評価している。事実、同胞団は主流派イスラーム主義組織として創設時から広く関心を集め、創設者ハサン・バンナーの思想や同胞団の歴史に着目した研究書がこれまでに数多く出版されてきた。しかし、著者の観点からは、これらの先行研究は組織や幹部といった「見えるもの」のみに焦点を当てるものであり、その点において偏りがある。

そこで著者は「見えないもの」に焦点を当てるために、グループから離脱した32人へのインタビューと離脱者によって出版された自伝を分析対象とし、フィールドワークと文献調査を組み合わせた研究手法を採用している。同胞団から離脱するという選択を自ら決断した「個人」に目を向けた研究は非常に希少である。同胞団を集団として捉える研究には、歴史的に時系列を追うもの［Mitchell 1993; Mellor 2018］、ムスリム政治における固有と多元性に着目しその中で同胞団を一例として掲げる研究［Mandaville 2020］などが挙げられるだろう。これに対し本著は、この研究史上の空白に焦点を当て、これまで「見えないもの」とされた「個人」を同胞団からの離脱に着目して可視化した点で、同胞団研究に新たな視座を与えている。

特に注目すべきが、第3章と第4章で論じられている「イデオロギー的離脱のマクロフレーム」と「政治的離脱」である。第3章において著者は「個人」に焦点を当てながら、それらを取り巻く環境もイデオロギー構築の過程に役割を果たすとして分析の対象に入れている。著者がインタビュー対象者になぜ離脱したのかと尋ねると、多くの人は「心の独立を望んでいた」と語る(83頁)。ここから、同胞団のイデオロギーが元メンバーを拘束していたことが窺える。同胞団はそのイデオロギーにおいて認知的柔軟性の欠如や反知性主義の傾向を持ち合わせており、「アラブの春」以前にはそこから逃れるために離脱が選択される傾向があった。これが「イデオロギー的離脱」である。これに対し第4章では、「アラブの春」以降に同胞団を離脱した元メンバーを「政治的離脱」として位置づけている。同胞団は革命を主導するべきグループであったにも関わらず、主体的に抗議に参加しなかったため、「非革命的」であることに幻滅したことが理由で離脱を選択する傾向が見られた。つまり、同時期の同胞団の政治的方針・行動に対する幻滅が、「アラブの春」以降における

主な離脱プロセスであった。第3章と第4章を比較すると、離脱には複数のフレーミングが存在することだけでなく、同胞団を一枚岩なものとして捉える説明の限界も示される。これは、著者が個人に焦点を当てた研究手法を選択したからである。同胞団を集団として扱う従来の研究からは見出せない成果であろう。

最後に、本書の課題について付言しておきたい。著者自身が、この研究にはいくつかの課題があり、検討の余地があると指摘している。課題の1つとして挙げられているのは、フィールドワークの際に選択したインタビュー対象者が著者に元メンバーの知人を紹介するかたちを採ったことで、「非確率抽出法」によってデータ収集がなされた点である。思想研究の場合、組織の幹部をはじめとするエリートへのインタビューやその言説を一次資料として分析するが、個人に目を向ける際には、なぜその「個人」を選んだのかという点が問題になる。「個人」に目を向け、その言説を組織からの離脱と紐づけて分析する際に、誰に対してインタビューを行い、どの言説を拾い上げるか、なぜその「個人」を選択したのかという背景の説明が求められる。

また、2010年代以降の同胞団の言説や「同胞団的イスラーム国家論」の実態を研究している評者の立場から言えば、本書のような離脱者研究を同胞団研究として位置づけるのであれば、メンバーの離脱は同胞団にとってどのような意味をもたらす行動なのか、または「個人」の感情やアイデンティティがいかに「集団」としての同胞団に集約されていたのかを紐解くことの必要性も感じられる。離脱者個人に着目する研究の新規性について高く評価しつつ、今後はさらに同胞団研究の多様化、重層化をはかっていきたい。

参照文献

〈外国語文献〉

Mandaville, Peter. 2020. *Islam and Politics* (3rd Edition). London and New York: Routledge.

Mellor, Noha. 2018. *Voice of the Muslim Brotherhood: Da'wa, Discourse, and Political Communication*. New York: Routledge.

Menshawy, Mustafa. 2017. *State, Memory, and Egypt's Victory in the 1973 War: Ruling by Discourse*. London: Palgrave Macmillan.

Mitchell, Richard P. 1993. *The Society of the Muslim Brothers*. New York: Oxford University Press.

〈ウェブサイト〉

SEPAD (the Sectarianism, Proxies and De-Sectarianization Project) <https://www.sepad.org.uk/about>（2022年7月20日最終アクセス）

（高橋　ひとみ　立命館大学大学院国際関係研究科）

Sami Al-Daghistani. 2021. *The Making of Islamic Economic Thought: Islamization, Law, and Moral Discourses*. Cambridge: Cambridge University Press. vii+323 pp.

19世紀末以来登場してきたイスラーム復興運動の波は、経済的な面では、冷戦期の資本主義と社会主義の論理への抵抗を携えながら、中東、東南アジアへと広がった。この波は、1970年代以降のイスラーム銀行・金融発展への道を用意し、21世紀、それは爆発的成長を遂げることとなった。一方、形式的にハラームなものを回避したその手法に次第に疑問が投げかけられるようになり、既存の経済システムとの違いは何なのか、イスラームのモラリティとは何だったのか、本質的かつ倫理的な問いが向けられることとなっている。

本書は、イスラームにおけるモラルと法という二つを軸にして構成されるイスラーム思想をテーマにしている。特に、19世紀末以降のイスラームの政治的復興運動、さらには20世紀後半からの経済学におけるイスラーム化における言説を分析したのち、近代以前のイスラーム知識人の思想を紹介し、7世紀から今までという長い歴史の中でシャリーアが描いてきたモラルとは何だったのか、その大きな命題に正面から向き合おうとしている。